

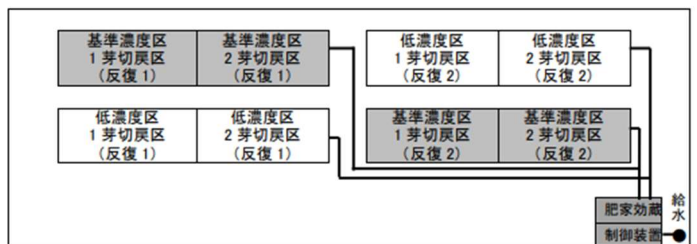
背景・目的

水稻育苗ハウスの有効利用方法として期待されるナスの養液栽培について、昨年度の品種比較試験で良好な成績を示した‘PC 筑陽’を用いて、給液濃度や剪定方法の違いが収量及び品質に与える影響を調査しました。

結果

栽培条件

- ・ 作型：ハウス夏秋どり（定植 5/24，収穫期間 6/20～11/1）
- ・ 栽植密度：1 条植え，株間 30cm，185 株/a
- ・ 仕立て方法：主枝 2 本仕立て
- ・ 環境制御装置による給液管理（日射比例方式）
- ・ 給液システム：「肥家効蔵」（株）サンホープ
- ・ 栽培槽：ヤシガラ培地「ココバック」（トヨハシ種苗（株））
- ・ 肥料：タンクミックス A と B の混合液を液肥原液として使用



<圃場図>

①給液濃度の比較

液肥混入率 0.5%から開始し，
最盛期の給液 EC の上限を

- ・ 2.0mS/cm とする区（基準濃度区）
- ・ 1.0mS/cm とする区（低濃度区）

②剪定方法の比較

果実収穫後に側枝を

- ・ 1 芽残して切り戻す区（1 芽切戻区）
- ・ 2 芽残して切り戻す区（2 芽切戻区）

① 給液濃度	② 剪定方法	収量 (kg/a)		特性 (cm)		作業性	
		良果	不良果	果実長	果実径	整枝・収穫	防除
基準濃度区	1 芽切戻区	920	386	20.9	5.7	初期 難 後期 易	○
	2 芽切戻区	932	360	21.0	5.6	初期 易 後期 難	△
低濃度区	1 芽切戻区	856	466	21.0	5.6	初期 難 後期 易	○
	2 芽切戻区	943	439	21.0	5.7	初期 易 後期 難	△



収穫したナス

- ・ いずれの区も良果収量は基準収量 700kg/a※を上回り，品質は同等。
- ・ 2 芽切戻区は，生育後期に枝が混みあい，作業性が悪く，防除も困難だった。

※北海道野菜地図（その 46）なす栽培技術体系における半促成作型の基準収量

結果の活かし方

給液濃度は，施肥量節減の観点から，給液 EC1.0mS/cm を上限として管理することを推奨します。また，剪定方法は，生育後期の管理のしやすさから，果実収穫後に側枝を 1 芽残して切り戻す方法を推奨します。